

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教 育 学 ）	氏名	王 金 芝
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p style="text-align: center;">中国人日本語学習者における逐次通訳のメカニズム －作動記憶の観点から－</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p style="text-align: center;">主 査            教 授            松 見   法 男 審査委員        教 授            中 條   和 光 審査委員        教 授            柳 澤   浩 哉</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本論文は、中国語を母語とする日本語学習者を対象に、逐次通訳の理解過程における情報の保持と処理の仕方を作動記憶（working memory: 以下, WM）の観点から検討したものである。具体的には、日本語から中国語への逐次通訳（以下, 日中逐次通訳）と中国語から日本語への逐次通訳（以下, 中日逐次通訳）のそれぞれについて、訳出開始時点を操作し、理解過程に及ぼす処理資源の影響を調べ、さらに構音抑制課題を用いて、理解過程における音韻情報の保持と意味処理への資源配分の仕方を調べた。また、リスニングスパンテストで測定した WM 容量を学習者の個人差要因として扱い、理解過程における情報の保持と処理の仕方が WM 容量の大小によって異なるのか否かを調べた。</p> <p>論文の構成は、次の通りである。</p> <p>第 1 章では、第二言語学習者における逐次通訳のメカニズムを解明する意義を述べた上で、逐次通訳に関する先行研究を概観した。本研究の枠組みとなる Baddeley (2000) の WM モデルを紹介し、WM と逐次通訳の理解過程、及び通訳方向との関係を論じた。そして、先行研究の問題点を指摘し、本研究の研究課題を提示した。</p> <p>第 2 章では、日中逐次通訳に関する 3 つの実験内容について述べた。実験 1a では訳出開始までに 2 秒の時間を挿入し、実験 1b では訳出開始までに暗算課題を挿入して、理解過程に及ぼす処理資源の影響を検討した。その結果、(1) 意味表象の構築が処理資源の制約を受けること、(2) 意味表象の形成度が起点言語の情報保持を左右すること、(3) WM 容量の大小による遂行成績の差が意味表象の形成度によって生じること、がわかった。実験 2 では、構音抑制課題を用い、理解過程における処理資源の配分の仕方を検討した。その結果、音韻情報の意味解析の効率が低いことにより、意味表象の構築に配分される処理資源が限られること、また WM 容量の大小により、音韻情報の意味解析の効率及び意味表象の構築に配分される処理資源の量が異なることが明らかとなった。学習者が日中逐次通訳を行う際は、日本語の情報処理効率が低いことにより、音韻情報を保持しながら意味表象を構築すること、そして意味表象が不完全なまま中国語に訳出することがわかった。</p> <p>第 3 章では、中日逐次通訳に関する 3 つの実験内容について述べた。実験 3a では訳出</p>			

開始までに 2 秒の時間を挿入し、実験 3b では訳出開始までに暗算課題を挿入して、理解過程に及ぼす処理資源の影響を検討した。その結果、意味表象の構築は処理資源の制約を受けるが、日中逐次通訳に比べてその制約が緩和されること、また逐次通訳の遂行成績に及ぼす WM 容量の大小による影響も、日中逐次通訳に比べて弱まることがわかった。実験 4 では、構音抑制課題を用い、理解過程における処理資源の配分の仕方を検討した。その結果、理解過程における資源配分の仕方が WM 容量の大小によって異なることがわかった。WM 容量の大きい学習者では処理資源の一部が目標言語の並行処理に割り当てられるが、WM 容量の小さい学習者では意味表象の構築に処理資源が集中的に配分されることがわかった。中日逐次通訳では、中国語の情報処理の効率、及び処理資源の配分の仕方により、日中逐次通訳の理解過程とは異なる心的過程が存在することが明らかとなった。

第 4 章では、実験 1 から実験 4 までのまとめを行い、逐次通訳の理解過程に及ぼす処理資源の影響、及び理解過程における処理資源の配分の仕方について、日中逐次通訳と中日逐次通訳の結果を比較しながら総合考察を行った。実験的検討の結果から、起点言語の情報処理の効率及び処理資源の配分の仕方によって、意味表象の形成度が異なり、起点言語の情報保持が左右されることが明らかとなった。最後に、それらを踏まえて、本研究の意義、日本語教育への示唆、及び今後の課題について述べた。

本論文は、次の 3 点で高く評価できる。

1. 逐次通訳の理解過程における WM の働き方について、体系的に実験を行い、その詳細を検討した点である。従来、逐次通訳の情報処理とその処理を担う WM の働きは切り離されて検討される傾向が強く、逐次通訳のメカニズムについて WM の機能を取り入れた実証的研究は、管見の限り見当たらない。本研究は、逐次通訳の理解過程における WM の働き方を解明し、その働き方が通訳方向と学習者の WM 容量の大小によって異なることを明らかにした。
2. 言語情報の保持と処理が逐次通訳の理解過程でどのように行われるかを、上級の日本語学習者を対象として検討した点である。逐次通訳に関する先行研究は、通訳の専門家や、通訳者を目指す高度な第二言語能力を備えた学習者を対象としたものが多く、第二言語の運用能力が発達途上にある学習者にその研究成果を応用することは難しかった。本研究は、日本語を含めた第二言語の教育場面に対して、通訳指導法の有効性を支える理論的根拠を提供することができた。
3. 逐次通訳研究の発展に寄与しうる新たな実験方法を考案した点である。起点言語の意味処理と並行して目標言語の検索が行われるか否かについては、多くの研究が訳出課題のみを用いて検討してきた。本研究では、2 つの通訳方向を設定し、これまで採用されなかった二重課題法によって、目標言語の並行処理の様相を調べた。第二言語から母語への逐次通訳と母語から第二言語への逐次通訳では、WM の機能との関連において、目標言語の並行処理が逐次通訳の遂行に及ぼす影響が異なることが明らかとなった。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。